

読み手としてのElizabeth Bennet

Elizabeth Bennet as a Reader

松村 聡子

MATSUMURA Satoko

はじめに

Jane Austen (1775-1817) の作品は、早まって判断してしまうこと (“prejudging”) と、それを修正する再判断 (“rejudging”) に関する物語——つまり一度形成した認識を改める物語である、と Tony Tanner は指摘しているが (105), *Pride and Prejudice* (1813) はまさに、主人公の Elizabeth Bennet が Mr. Darcy と出会って結婚に至るまでの間に、彼への認識を大きく変える物語である。Elizabeth は当初、Darcy への反感を強く抱き、「知り合ってからひと月もしないうちに、どんなことがあっても結婚したくない」(215) とまで思うほどであった。彼女は Mr. Bingley から「人間の性格の研究家」だと水を向けられると、観察の対象として、「複雑な性格の人たちの方が断然面白い」と応じている (47)。その彼女が Darcy の人柄を判断するに当たっては、「知り合った最初の瞬間からと言ってもいいくらい、そもそもの初めから、あなたの振る舞いは私に高慢でうぬぼれの強い人だという印象を抱かせ、人の気持ちを顧みない態度が反感の下地となったんです。その後、それがどうしようもない嫌悪感になりました」(215) と述べて、求婚した彼への敵愾心をむき出しにしている。こうして一旦は Darcy からの求婚をはねつけた Elizabeth であるが、作品の中盤以降、彼への評価は大きく変わっていく。しかし、興味深いことにこの認識の変化は、Darcy が目の前にいて直接言葉を交わしたり、彼の言動を観察したりして生じるものではない。Susan C. Greenfield も指摘しているように、主に Darcy がその場にはいない、不在の場面で起きるのである。¹⁾ この変化の最初のきっかけとなったのは、Elizabeth が求婚を断った翌日に、Darcy から手渡された手紙を読んだことにある。手紙を読んだ彼女は激しく動揺し、様々に思いを巡らせていく。さらに、Gardiner 夫妻とともに彼の邸宅である Pemberley を見物したこと、そこで聞かされた家政婦の話や、Lydia が Wickham と出奔した際に Darcy が取った行動を説明する Mrs. Gardiner からの手紙などの情報によって、Elizabeth は彼への認識をはっきりと改め、愛情を育んでいく。本稿では、Elizabeth がいかに Darcy の手紙を読み、そこから続く一連の出来事で彼の人間性を「読んで」いったのか、読者が作品を読む行為とも関連づけながら考察していく。²⁾

1 印象と視点

まずは、Elizabeth が出会った当初の Darcy の人柄に対して、どのような認識を抱いたのかを確認しておきたい。Bingley の友人として Meryton の舞踏会場に現れた Darcy は、Derbyshire に大きな地所を持ち、年収は一万ポンドにのぼる素晴らしい青年地主という触れ込みで、たちまちその場に居合わせた人々の注目の的となる。ところが、人を寄せ付けず、踊りの列に加わろうとしない高慢な彼の態度で、当初の彼への高い評価はあっという間に失墜してしまう。

What a contrast between him and his friend! Mr. Darcy danced only once with Mrs. Hurst and once with Miss Bingley, declined being introduced to any other lady, and spent the rest of the evening in walking about the room, speaking occasionally to one of his own party. His character was decided. He was the proudest, most disagreeable man in the world, and every body hoped that he would never come there again. Amongst the most violent against him was Mrs. Bennet, whose dislike of his general behaviour, was sharpened into particular resentment, by his having slighted one of her daughters. (11)

Northanger Abbey (1818) では、Henry Tilneyがダンスと結婚との類似性について指摘しているが、実際問題として、舞踏会は地域における重要な社交の場であり、ことに若い未婚女性にとっては将来の伴侶と巡り合う可能性を提供してくれる貴重な場でもあった。³⁾ したがって、Darcyがお高くとまっで地域社会に馴染もうとしない態度を見せたことに、反感の目が向けられたのはやむを得ないだろう。しかし、それにしても引用部では、「もっとも高慢で、世界で一番感じが悪い」といった表現をはじめ、きわめて強い調子でDarcyが非難されている。また引用部分には、「みんなが彼には二度と来てほしくないと思った」という箇所もある。ここで言われている「みんな」とはいったい誰を指すのだろうか。というのも、この舞踏会の翌日、Bennet家を訪れたCharlotte Lucasは、家柄にも財力にも容姿にも恵まれたDarcyには、高慢になる「ちゃんとした理由」があるとして、彼の思い上がった態度に彼女自身は「あまり腹が立たない」と述べているのである (21)。Darcyの会場での態度は確かに感じがよいとは言えないものの、彼の態度で実際に不愉快な思いをしたのは、「まあまあだけど、僕が踊りたいと思うほどの美人じゃない」(12) と言われてしまったElizabethと、娘が侮辱されたと知ったMrs. Bennetだけであり、Charlotteの意見の方が、むしろその場の大多数の人々の見解を代弁していると言える (Minma 53)。⁴⁾ 引用部の最後には、Mrs. BennetがDarcyに感じた嫌悪感に触れられている。「頭が悪く、教養もなければ情緒も不安定」(5) と語り手によって紹介されるMrs. Bennetは、興奮しやすく決めつけるような口調で、大げさな表現を用いる傾向が顕著である。こうした彼女の特徴は、近所に越してきたBingleyを夫に訪問させようと、何とか説きつけようとする作品の冒頭部分ですでに大いに発揮されている。こうしたことを考え合わせると、引用前半部の誇張された激しい口調は、Mrs. Bennetの視点が語りの中に入り込んだ自由間接話法ととらえることができるだろう。ともかく、このように大仰な表現を用いることで、Darcyへの評価が短時間で劇的に変わりうることが強調される。Darcyへの評価がまたたく間に変わってしまったことは、この作品において人柄を見極め、人物を評価することの難しさを示す先触れとなっていると言える。

Netherfieldの舞踏会で、Darcyと踊る羽目になってしまったElizabethは、言葉によるDarcyの「肖像」を描こうとする。このときのElizabethは、すでにWickhamがDarcyから受けたという過去のひどい仕打ちについて聞いていたため、彼に対してますます反感が強くなっており、その反感をもとにDarcy像を描いていこうとする。

“I remember hearing you once say, Mr. Darcy, that you hardly ever forgave, that your resentment once created was unappeasable. You are very cautious, I suppose, as to its *being created*.”

“I am,” said he, with a firm voice.

“And never allow yourself to be blinded by prejudice?”

“I hope not.”

“It is particularly incumbent on those who never change their opinion, to be secure of judging properly at first.”

“May I ask to what these questions tend?”

“Merely to the illustration of *your* character,” said she, endeavouring to shake off her gravity. “I am trying to make it out.”

“And what is your success?”

She shook her head. “I do not get on at all. I hear such different accounts of you as puzzle me exceedingly.”

“I can readily believe,” answered he gravely, “that report may vary greatly with respect to me; and I could wish, Miss Bennet, that you were not to sketch my character at the present moment, as there is reason to fear that the performance would reflect no credit on either.”

“But if I do not take your likeness now, I may never have another opportunity.” (105)

Alistair M. Duckworthも指摘しているように、絵画の比喩を使って会話が展開されるこの場面は、のちにElizabethがPemberleyを訪れてDarcyの肖像画と対面する場面と対応している (122)。このPemberleyでの場面については後述するが、言葉によっても絵筆によっても、相手の似姿を写し取るうとする行為は、描き手が相手への評価の固定化を図ろうとする作業であると言える。引用部分では、Elizabethは“never”を三回使っている。そのうち初めの二回は、強い否定の表現を用いて本人の確認を取るそぶりを見せつつ、Darcyの性格を頭から決めつけようと試みているのだ。したがって、そのように描かれた肖像には、描き手の側の主観が大きく入り込み、モデルとなる人物のイメージをゆがめてしまう危険性がある。このことは、*Emma* (1816)において、ヒロインのEmma Woodhouseが年下の友人、Harriet Smithの肖像画を描く場面にはっきりと見て取れる。縁結び役を買って出たいEmmaは、HarrietをMr. Eltonの花嫁にしたいばかりに、友人を実物よりも数段優雅に見えるよう、「体つきに手心を加えて身長を少し高くする」(48)など、自らの好みに合わせて修正しながら肖像画を描いた。Emmaにとって、Harrietの肖像を描くことは、本人にその意識がなくても、友人の人生に不当に介入し、彼女の人生を支配しようとすることに他ならないのである。Elizabethは複雑な人柄の研究を好んでいると述べたことを上述したが、ここでのElizabethは、Darcyの人柄を判断するのにじっくりと時間をかけようとはしていない。同時にElizabethは、三回目の“never”を使って、今後このような機会がないかもしれないと述べることで、彼の肖像画を言葉の上で無理にでも描き切ってしまうおとしている。それだけに一層、モデルの人柄をゆがめてとらえてしまう危険性が高いということが言えるのである。

Elizabethが早急にDarcy像を描こうとしているのに対して、Darcyの方は彼自身についての評判が人によってまちまちであること、つまり多様な見方の可能性に言及し、「今、僕のスケッチを描かない方がいいと思う」と警告を発していることに、注意を払う必要があるだろう。もっともこのときのElizabeth自身は、Darcyの訴えをほとんど顧慮していない。Darcy像を「上手くとらえられない」と述べる一方で、彼女の視点から見たDarcy像の構築に固執している。けれどものちにPemberleyを訪れた際、Elizabethは同じものも違う角度から見ることによって、見え方が変わってくるという事象を自ら体感することになる。

Elizabeth, after slightly surveying it, went to a window to enjoy its prospect. The hill, crowned with wood, from which they had descended, receiving increased abruptness from the distance, was a beautiful object. Every disposition of the ground was good; and she looked on the whole scene, the river, the trees scattered on its banks, and the winding of the valley, as far as she could trace it, with delight. As they passed into other rooms, these objects were taking different positions; but from every window there were beauties to be seen. (272)

Rosingsの壮麗さの象徴として、Mr. Collinsは窓の数を得意気にElizabethに伝えたが、ここでもさまざまな角度から景色が楽しめる多くの窓に、Pemberleyの広大さやDarcyの財力の豊かさを感じ取ることができる。けれども、それ以上にこの場面で重要なのは、窓が一種の額縁の役割を果たしていることである。美しい風景が窓の枠で切り取られ、それぞれが別の絵画のようにElizabethの前に次々と広がっていく。景色を構成している要素は変わらないのに、見る人の視点によって位置関係が変わって見えるのだ。⁵⁾この引用部は、ElizabethがDarcyを新たな視点で見直しつつあることを象徴的に表している場面と言えるだろう。したがって、この景色を様々な角度から見ることに慣れているはずのDarcyが、Netherfieldの舞踏会でElizabethに急いで肖像を描かないようにと忠告したのは偶然とは思われない。また、当初Elizabethの容姿についてのみ論評したDarcyが、早い時点で彼女の

知性から輝き出る瞳の美しさに気づき——別の言い方をするとElizabethを価値づける新たな見方に気がつき——彼女に注目するようになったことも偶然とは言えないだろう。実際、彼は嫉妬したMiss Bingleyから、結婚後もElizabethの肖像を描かせない方がいい、と揶揄されると「確かに目の表情をとらえるのは簡単ではないでしょうね。あの素晴らしい目の色や形、それにまつ毛なら何とか絵にすることができるかもしれませんが」(57)と真面目に答えて、内面性まで肖像として描き出すことの難しさを示唆している。ひとたびElizabethの魅力に気がついたDarcyは、彼女が他の人と会話をしているのを聞くことによって、彼女をよりよく知ろうとすることも注目に値する。DarcyのElizabeth観は、彼との直接の対話によってよりもむしろ、彼女が彼以外の人と関わっている場面を観察することによって形成されている面が強い。JaneがNetherfieldで体調を崩したときに見舞いに訪れた際のElizabethの行動や、Miss Bingleyの当てこすりに対する対応、Lucas Lodgeのパーティで彼女が他のゲストたちと交わした会話の様子など、立場の違う人たちと彼女との関わりを観察することを通して、より多角的な視点でElizabethの人物を評価する機会を上手くとらえていたとすることができるだろう。

2 手紙を読むElizabeth

*Pride and Prejudice*では、同じ事象でも見る人によって見方が変わり、視点が変わると違って見えることや、そうした様々な見方に対してどう判断をすべきなのか、といった問題が繰り返し作品内で検討される。早急に人間性を判断し、決めつけてしまうことの危うさが警告されているのだ。Elizabeth自身への見方も人によってまちまちであり、両親ですら正反対とも言える評価を彼女に下している。すなわち、Mr. BennetはElizabethの知性と活気に満ちた気質を高く買っている一方で、母親の方は、取り立てて彼女に美点を認めていない。Mrs. Bennetにとっては、容姿の点ではJaneが、気立ての点ではLydiaがElizabethよりもはるかに勝っているのである。また、Janeを見舞うためにNetherfieldまで歩いたため、泥に汚れ、乱れた髪で現れたElizabethの姿に、Miss BingleyとMrs. Hurstは、「思い上がった勝手気ままな行為や、礼儀をかまわない田舎者の無神経さ」(39)を見ているのに対し、同じ姿でもBingleyは姉に対する愛情の深さを感じている。見る側の思惑で見え方がまったく違ってきているのだ。

同様のことは、手紙を読むという行為においても起こりうる。読み手の思惑が入り込んで、人それぞれに反応が違ふことは、作品の中で手紙が最初に提示される第一巻の七章で、早くも示される。Janeに宛てたMiss Bingleyのこの手紙の本文は、以下のような短いものであった。

If you are not so compassionate as to dine to-day with Louisa and me, we shall be in danger of hating each other for the rest of our lives, for a whole day's tête-à-tête between two women can never end without a quarrel. Come as soon as you can on the receipt of this. My brother and the gentlemen are to dine with the officers. (33)

このわずかな文面が読み上げられると、Lydiaは最後の“officers”という語にのみ反応を示し、Mrs. Bennetは男性たちが不在であるという点にのみ着目する。このような反応からは、メッセージの内容そのものよりも、読み手のたち関心がそれぞれどこにあるのかが浮き彫りとなる。また、Longbournを訪問したいというMr. Collinsから舞い込んだ手紙に対しては、さらにBennet家の一人ひとりが様々な反応を見せる。Mr. BennetはCollinsを愚鈍な男と判断し、Mrs. Bennetは娘たちに言及されていたことに期待を寄せ、JaneはCollinsが何らかの「償い」(71)を仄めかした点を彼の美点として取り上げ、Elizabethは手紙のわざとらしいもったいぶった調子に異様な感じを持ち、Maryは逆にCollinsの文体を擁護し、KittyとLydiaは一切関心を払わない、という具合である。この手紙全体は作品の中に提示されているので、読者自身もBennet家の人々とともに、手紙の文面から人物像を判断する作業に加わり、Mr. Bennetの言葉を借りるなら「早く会ってみたいもんだ」(71)とい

う興味を掻き立てられることになる。そしてまた、このような反応の多様性は、Duckworthも指摘するように、ひとつの事象に対する「読み」の多様性をそのまま示すものと言うことができる (117)。

手紙を読んだときの反応の違いは、読み手の違いだけに起因するのではない。同じ読み手でも、そのときどきの状況によって、読後の印象とそこから導き出す判断が大いに変わってくることもありうる。このことは、Elizabeth自身の身にも起こる。例えば、Darcyからの一回目のプロポーズを受ける前の場面で、Elizabethは散歩をしながらJaneの手紙を読み返して、姉が「明らかに元気のない調子で書いた部分」(204-05) について物思いにふけている。そのとき、Colonel FitzwilliamからDarcyが中心となってJaneとBingleyの仲を裂いたらしいということを聞かされた彼女は、牧師館に戻ってJaneから届いた手紙をすべて読み返してみる。すると、手紙には「具体的な不満が書いてあるわけでも、過去の出来事を蒸し返しているわけでもない」のに、「初読時にはほとんど気がつかなかった不安感」が、すべての文ににじみ出ていることに気がつくのだ (210)。Janeの手紙の文面は読者には示されていないため、Elizabethの再読による解釈がどの程度適切なのかを読者は直接判断することができない。けれども、大佐の話から受けた影響が、姉への同情とDarcyへの嫌悪感となって彼女の中で増幅し、手紙の再読時に、当初はほんの一部分だけにしか感じ取ることができなかった姉の意気消沈ぶりや不安感が、手紙全文に広がってとらえられたと考えるのが妥当であろう。つまり、「不安感」はJaneの文面全体に初めから埋め込まれていたというのではなくて、読み手であるElizabeth自身の気持ちの反映だと考えられるのだ。

この直後に起こったDarcyからの求婚は、Elizabethにとっては青天の霹靂とも言うべき出来事であった。社会的地位の違いを盛んに述べ立てるDarcyに対して怒りを募らせながらも、彼女は「忍耐強く返事をしようと思いを落ち着かせ」(211)、また「冷静に話をするために最大限の努力をした」(215)。けれどもDarcyが不安や心配を口にしながらも、「色よい返事がもらえることを少しも疑っていない」(212) 様子であるのを見て取ると、彼女は怒りがこみ上げてくるのを抑えることができない。前節では、Elizabethに比べるとDarcyはより多角的な視点で彼女の気持を捉えていたと論じたが、彼女の気持ちに関しては、Darcyはまったく「読めて」いなかったことになる。男性優位の社会の中で、Elizabethのように財産のない女性は求婚を拒まないはずだという思い込みや、自分の都合ばかりを申し立て、彼女の幸せについてはほとんど発言しない点など、DarcyのプロポーズはCollinsとも似たところがあると言わざるを得ない (Johnson 82)。けれども、Collinsと違って彼女の知性を評価しているDarcyは、拒絶の返事を男性の側の愛情をさらに煽るための「単なる言葉の上だけのもの」(121) として受け止めるようなことはなかった。Elizabethが拒んだことに大きな衝撃を受けた彼の様子は、「必死で落ち着きを保とうとし、平静になれたと自分で思うまで口を開こうとしなかった」(212) と述べられている。こうして、双方とも冷静さを保とうと必死の努力をしたが、それでもこのような緊迫した場面で気持ちを落ち着けることは容易ではない。拒絶の理由を尋ねたDarcyに、Elizabethは彼が相思相愛だったJaneとBingleyの仲を無残にも裂いたこと、それにWickhamにひどい仕打ちをして経済的打撃を与えたことを興奮した調子でまくし立ててしまい、Darcyは驚愕を抑えられないまま、彼女のもとを辞するのである。

Elizabethは翌朝、一人で戸外を散歩しているときに、Darcyの手から直接手紙を渡される。そして彼は手紙を渡すとすぐに彼女の前から姿を消し、翌日にはRosingsを後にする。こうしてDarcyが不在となった状態で、Elizabethの「読み」の作業が始まることになる。手紙の中でDarcyは、前日にElizabethから非難された点について弁解をしていくわけだが、その最後の部分で、「昨日は平静になれなくて、何を話したらよいのか、また何を話すべきなのかが分からなかったのです」(225) と綴っている。そもそも手紙という伝達手段自体が、受け手が目の前にいない、という不在を前提としているものだが、手紙は対話の場合と違って相手の反応が直接的に伝わってこないため、プロポーズの場面では難しかった冷静さを保持するための手段として選ばれたのだと言える。またDarcyにとって、妹のGeorgianaとWickhamの駆け落ち未遂事件は、口頭で伝えるにはあまりにデリケートな問題であった。Elizabethは、求婚されたときの衝撃と興奮を沈め、この出来事について考えるために、一

人で散歩をする必要があったわけだが、⁶⁾ 彼にとっても、Georgianaの一件を話すかどうかという判断を含め、ある程度の落ち着きを取り戻すために、一度Elizabethの面前から退いて沈思する必要があったのだと言えるだろう。

第二巻の十二章は、大部分がこのDarcyからの手紙の提示となっており、手紙がテキストを支配している。「紙面いっぱいびっしりと書かれていた」(218) という手紙は、テキスト上でも、彼がこれまでのいきさつについて説明を始めてからは一度も改行されておらず、読者は文字のつまり具合を見て驚いたというElizabethの気持ちを、視覚的な面からある程度追体験できるようになっている。そして、このDarcyが支配したテキストを前にして、読者はElizabethと同じ立場で手紙を読むことになるのである。⁷⁾ それまでは、Elizabethの視点から眺められることが多かったDarcyの声を、彼女とともに手紙という文字情報を通じて聞くことで、読者も主体的に「読み」に参加するのだ。

続く十三章は、ElizabethがいかにかDarcyの手紙を読んだか、彼女自身の「読み」についての記述で占められている。読者は手紙を読んで受けた自らの印象を、今度はElizabethの受け止め方と比べることになるのである。

She put down the letter, weighed every circumstance with what she meant to be impartiality—deliberated on the probability of each statement—but with little success. On both sides it was only assertion. Again she read on. But every line proved more clearly that the affair, which she had believed it impossible that any contrivance could so represent, as to render Mr. Darcy's conduct in it less than infamous, was capable of a turn which must make him entirely blameless throughout the whole. (227-28)

Elizabeth自身も気が付いているように、DarcyとWickhamの関係について当事者たちの説明が食い違っている、どちらも「主張だけ」である。具体的な証拠はない。したがって、Elizabethは、何度も手紙を読み返しながら、Darcyの説明を吟味していくことになる。一度目は字面を無我夢中で追うだけだった彼女だが、二度目以降は、妥当な解釈を検討しながら読んでいくため、たびたび読む行為を中断して、文面から離れ、これまでのいきさつを思い返す。つまり、ここで彼女が読み返しているのは、手紙だけではなく、この手紙にたどり着くまでのテキストが語ってきたこと全体なのである。読者もElizabethと同様に、これまでにテキストから得られた情報の再評価を求められる(Stafford xxii)。さらに、読者はその読み返す作業をしているElizabethの判断や「読み」の妥当性を検証していかねばならない状況に置かれるということになる。こうして、読者の「読み」の作業は複雑化される。

手紙を読み進めていく中、Elizabethは、Georgianaの駆け落ち未遂のくだりまで再読すると、彼女を話題に持ち出したときのColonel Fitzwilliamの反応を思い出す。

After pausing of this point a considerable while, she once more continued to read. But, alas! the story which followed of his designs on Miss Darcy, received some confirmation from what had passed between Colonel Fitzwilliam and herself only the morning before;... At one time she had almost resolved on applying to him, but the idea was checked by the awkwardness of the application, and at length wholly banished by the conviction that Mr. Darcy would never have hazarded such a proposal, if he had not been well assured of his cousin's corroboration. (228-29)

一旦は大佐に問い合わせて、証言を確認してみようかという気にはなるものの、Elizabethは結局、過去の事実についてColonel Fitzwilliamへの問い合わせを控えることにする。大佐が確証を与えてくれるとDarcyが信じていなければ、大佐の名を挙げることはないだろうと、彼女が「確信」したか

らである。そして彼女は、Wickhamの人当たりのいいわべの良さは思い出せても、彼の真の人柄についての確信が得られないことに気がつく。このようにElizabethは、手紙の内容について誰にも相談することなく、一人で検討を続けていくことになる。Darcyから求婚された事実と、彼が手紙の中で説明したWickhamとの一件を、最も信頼できる相談相手のJaneに打ち明けるのは、これまでの自分の判断が間違っていたことを彼女が自省した後である。つまり、Elizabethがここで求めているのは、明白な証拠や証言、それに相談相手ではない。他から与えられる証拠や助言に頼るのではなく、これまでの経験や観察から得られた情報を、彼女自身の中で筋道の立つように整理し、自分が確信できるものは何か、何が最も納得できるのかという理性的な推論を打ち立てることなのである。

Marilyn Butlerが述べているように、これまでのElizabethは、自分の判断が理性ではなく、好き嫌いの感情に基づいたものであることに気がついていなかった(209)。したがって、手紙を読み直す作業は、自分を見つめ直す作業でもある。そしてElizabethは最終的に、これまでDarcyとWickhamの人柄を「読み」間違えていたのだとの結論に達する。自分の判断は誤っており、「盲目で不公平で偏見に凝り固まっていて愚鈍だった」(230)との自己認識に至るのである。けれども、これで直ちに彼女のDarcyへの気持ちが変わったわけではない。彼女がDarcyを受け入れられるようになるまでは、さらに時間が必要だったのであり、彼女はその後、彼の手紙のあらゆる文を「もうすぐ暗記してしまいそう」(235)なくらい読み込むことで、さらに自己分析を続けていく。Greenfieldも指摘するように、Darcyの不在が彼女に新たな思考を促すことになったのであり(337)、彼が目の前にいないからこそ、より冷静に、より公正にDarcyの人柄を、そして自分自身の気持ちを「読む」ことが可能となったのである。公正さを貫こうという彼女の姿勢は、Wickhamの件でDarcyの主張が正しいと認めた後に、JaneとBingleyの関係についても彼の言い分を認めなければならないとし、判断し直そうとする態度に明らかである。そしてElizabeth同様、確たる証拠を与えられない読者もまた、Elizabethの「読み」をどう判断すべきか考えるように仕向けられる。*Pride and Prejudice*は、Tannerが指摘した判断と再判断の過程を登場人物のElizabethだけでなく、読者にも経験させるのである。

3 見つめられるElizabeth

Darcyからの手紙によって、Elizabethはそれまでの自分の判断が間違っていたことを猛省したが、彼についての思いは、これで解決したわけではなかった。彼女はDarcyを不当に激しく非難してしまったことを悔いたが、だからといって、「彼を肯定することはできないし、プロポーズを断ったことを一瞬でも後悔することはできないし、もう一度彼に会いたいとも全然思わなかった」(236)のである。それが、決定的に変わるのは、Gardiner夫妻とともにDerbyshireに旅行に来たElizabethが、Darcyの邸宅、Pemberleyを訪れたときである。ここで彼女は、彼の肖像画——言葉によるものではなく、本物の肖像画——と対面する。家政婦のMrs. Reynoldsが彼を褒め上げるのを聞き、肖像画のDarcy像と目を合わせることで、Elizabethの中でDarcyへの感謝の気持ちが湧き上がり、彼女のDarcy観は決定的に変わっていく。

In the gallery there were many family portraits, but they could have little to fix the attention of a stranger. Elizabeth walked on in quest of the only face whose features would be known to her. At last *it arrested her*—and she beheld a striking resemblance of Mr. Darcy, with such a smile over the face, as she remembered to have sometimes seen, *when he looked at her*. She stood several minutes before the picture in earnest contemplation, and returned to it again before they quitted the gallery. (277, emphases added)

引用部では彼女が彼の肖像画を見つけたという表現が“it arrested her”となっており、構文上は「肖像の方がElizabethをとらえた」という形になっている。さらに、その絵を見つめながら彼女が思い描くのは、Darcyが彼女を見つめていたときの表情である。つまり、引用部では、見つめている主

体であるはずの彼女が、見つめられる客体へと変換されているのだ (Fraiman 84-85)。この後、邸内での見学が終わったElizabethたちは、Pemberleyの庭園を案内されるが、そこで思いもかけずDarcy本人と鉢合わせしてしまう。だが、実物のDarcyと再会したとき、Elizabethは肖像画の場合とは違って、彼と視線を合わせることができない。困惑のあまりほとんど顔を上げることもできないElizabethは、「彼の目にはどんなに奇妙に見えただろう。あんなに虚栄心の強い人には、どんなにみっともなく映ったことだろう」(279) と、自分がどのように見られたかを気にするのである。Darcyからプロポーズを受ける前のRosingsでは、ピアノを演奏する彼女を見つめる彼の視線に気づいたとき、臆することなく「妹さんがどんなに素晴らしい演奏をなさろうとも、私は怯えたりしませんわよ」(195) と、挑戦的な態度を取ることができたElizabethであるが、Pemberleyでは、もはやDarcyの視線を意識しないわけにはいなくなっている。つまり、感謝の念が次第に愛情へと醸成されていく過程で、自分がいかに彼を「読む」かではなく、彼からいかに「読まれて」いるのかということに、彼女の意識の焦点がずれていっているのである。

作品の舞台がLongbournに戻り、Elizabethの前に再びDarcyが現れたとき、「まずは彼の態度を見てみよう」と彼女は考え、「期待をかけるのはそれからでも遅くはない」と自らに言い聞かせる (370)。しかし、実際には、針仕事に夢中なふりをしながら「一度だけ思い切って彼をちらっと見る」(371) ことしかできない。PemberleyではDarcyの肖像画に正面から向き合い、見つめ合って彼への新たな認識に目覚めたElizabethだが、Longbournでは、むっつりとした彼の様子に当惑せざるを得ない。「好奇心に負けて彼の顔の方に目を挙げると、彼はJaneの方を見ていたり、彼女自身の方を見ていたりすることもあったが、特に何を見るというでもなく下を向いていることもしばしばあった」(371) とあるように、たまたま視線が合うことはあっても、Elizabethはそこから何か彼の気持ちを「読み取る」ということはできていない。かといって「彼以外の誰とも会話をする気になれなかったが、彼に話しかける勇気はなかった」(371) と述べられているように、直接言葉を交わすことによって理解を図ることもできなくなってしまう。このように二人は顔を合わせる機会に恵まれても、直接のコミュニケーションはなかなか上手くいかない。⁸⁾ トランプのテーブルがDarcyと別々になってしまったElizabethは、「彼の目がしょっちゅう彼女の方に向けられる」(378) ことを期待するばかりである。彼に見つめられ、彼の視線の対象になることが、ここでも望まれるのである。

おわりに

ElizabethはDarcyの人柄に対する認識の変化を、主に彼が不在の場で、手紙や肖像画といった、いわば彼を指し示す記号に向き合うことで成し遂げた。そしてそれは、彼女がDarcyへの自分の気持ちを見極めていく過程と並行しており、自分自身を見つめ直していく中で、Elizabethは成長していく。けれども、こうした間接的な手段で理解へ至る道をたどったのは、Elizabethだけではない。Elizabethの人物評価という点では、より多角的な視点からとらえることに成功していたと言えるものの、Darcyは彼女の気持ちを完全に「読み」損ねていた。作品の終盤で、Elizabethの気持ちをつかみかねたままLondonへと行った彼が、再び希望をもってLongbournに戻ってくるのは、Lady CatherineのElizabeth酷評という間接的な情報を聞かされたことによる。礼儀作法やしきたりなどの社会的な制約のもとでは、未婚の男女が直接コミュニケーションを取れる機会そのものがそもそも少ない。また、お互いに相手を意識しあうと、Longbournで二人が再び対面したときのように、自分の気持ちを素直に表現することは、かえって難しくなってしまう。様々な社会的、心理的な制約がある中、一度相手に下した判断をどう修正するか、しかも目の前に相手がおらず、情報量も限られた中で、納得できる推論を打ち立てて相手の人間性や気持ちをどう把握していくかという問題を、Austenはこの作品で、読者をElizabethの「読み」に巻き込む形で追求したのである。

Darcyへの愛を自覚したとき、Elizabethは「彼の判断力や見識、世間についての知識から、自分はより大きな利益を得ることができるに違いない」(344) と考える。ここには、よりの確かな判断をDarcyに委ねたいという彼女の意向がうかがえる。Elizabethは、Darcyからの手紙を読み込むこと

で思考の幅を広げ、推論を重ねていく知性を誇っていたし、読者にとってはそれが彼女の大きな魅力であった。しかし、Darcyへの愛に目覚めていく過程は、主体的に判断し、みずから「読み」を展開する立場から、見つめられることを意識し「読まれる」立場へと転換していく過程でもある。結婚してDarcyが当主であるPemberleyの領域に入っていくということは、「兄として、地主として、当主として」(277) 様々な役割と責任を負い、実行力のあるDarcyの保護下に入ることを意味する。⁹⁾ 彼女がDarcyに向かって述べた「私の美点はあなたの保護のもとにある」(422) という言葉は、この点を裏書きしている。また、Lydiaの駆け落ち騒ぎは、Elizabethが女性として、実効性のある行動を取れないことを明らかにした。Mrs. Gardinerからの手紙により、彼女はDarcyが事態を収めるためにあらゆる労を取ってくれたことを知ったのだが、このことは、問題解決のために奔走し、交渉し、片をつけることができるのは、男性であるDarcyなのだということを明白に示したのである。

二人はお互いの愛情を確かめ合った後、様々なことを語り合うが、その中にJaneのBingleyへの愛情に関してのやりとりがある。ElizabethがDarcyに、Janeの愛情を確信したのは「あなたご自身の観察からですか、それとも私がこの春にそう話したからですか」(412) と問うと、Darcyは自分の観察からだだと即答している。このことは、今後Elizabethが何かを示唆することができても、判断そのものはDarcyが下していくことになるということを予示的に表していると言えるだろう。結末部分で述べられるLady Catherineへの対応は、その例のひとつと考えられる。Elizabethは、二人の結婚に激怒したLady Catherineとの和解を促すことはできても、実際にそのための行動を取るのにはDarcyである。Elizabethは、ときにDarcyをからかい、「女性は夫に自由にふるまうこともできる」(430) ということをGeorgianaに示すことで、陽気さと明るさというこれまでにない要素をPemberleyに持ち込んだ。さらにはGardiner夫妻との親密な交際も相まって、Pemberleyがより一層活気づくであろうことが、作品の最後に示唆されている。けれども同時にElizabethにとってDarcyとの結婚は、重要な判断事項とその実行を彼に委ねていくことをも意味しているのである。

注

- 1) Greenfieldは、Elizabethの認識の変化をJohn LockeやDavid Humeの認識論との関係から論じている。
- 2) 本稿では相手の表情や気持ちなど、文字情報以外のものも含めて、より広い意味で何かを読み取り、了解しようとするときには「読む」のようにかっこをつけて表記することとする。
- 3) HenryはCatherine Morlandに向かって、「カントリー・ダンスも結婚も、忠誠心と相手を満足させることが双方の主な義務で、ダンスや結婚をしない男性は、他人のダンスパートナーや奥さんには何の用もないはず」(74) と述べている。ダンスを拒否する態度は、結婚を拒否する態度に結びつけられる。実際、ダンスに対して軽蔑的な発言をしたHenryの兄のFrederickは、Isabella Thorpeを誘惑するそぶりを見せても、結婚をまったく考えていない。また、将来の伴侶に出会うための場としてのダンスの重要性、そしてElizabethが経験したように、ダンス会場に男性の数のほうが少ない事情については、Jones 45-47を参照。
- 4) Elvia Casalは、Elizabethに特徴的な「笑い (“laughter”）」について論じた中で、このDarcyの発言を彼女が明るく吹聴して回ることにについて取り上げている。それによるとElizabethの行動は、Darcyの発言で受けた心の痛みを否定し、周囲の同情と支持を得ることで、非はダンスパートナーとしての望ましさに欠けた彼女自身ではなく、彼の高慢さの方にあるのだ、とこの出来事を再定義しているのである。
- 5) *Pride and Prejudice*における絵画や視点の問題については、拙稿「絵画・空間・相互理解——『自負と偏見』における一考察——」を参照されたい。
- 6) Judith W. Pageが述べているように、戸外はプライバシーが保たれるため、室内では一人になれる機会の少ない女性が、一人で考えにふけることができる場所としてきわめて重要であった (101)。これ以降もElizabethは一人で物思いにふけりたときは、しばしば庭や戸外での散歩という手段を選んでいる。またAlison G. Sullowayも、庭は若い未婚女性が安全に屋外で一人になれる場所として規定している (186)。
- 7) Fiona Staffordは、Elizabeth自身がテキストの中で読者としての地位を占めることできるということが、彼女の魅力のひとつとなっていると指摘している (xxii)。
- 8) Ann Gaylinは、ElizabethとDarcyが二人で直接コミュニケーションを取る機会を重視し、二人の直接の会

話で相互理解に至ると主張している。確かにこの後、Darcyが二回目のプロポーズをする場面では、二人が会話を通じてそれまでの数々の誤解を解いていくが、それはElizabethが彼の愛を受け入れた後のことである。つまり、相互の理解は直接のコミュニケーションによってなされるのではなく、二人が理解し合える下地が整ってから、直接のコミュニケーションが上手く機能するようになったのである。

- 9) Sandra Macphersonは、限定相続や土地の所有や賃貸という点に着目して、*Pride and Prejudice*を考察している。その中で、Bingleyの社交性豊かな愛想の良さは、Netherfieldを借りているだけの気軽さと、一方のDarcyの無愛想ぶりは、彼が地所を所有していることの重圧や責任感と結びつけられている。また、多くの批評家が指摘するように、Bingleyが最後に地所を購入することは、彼が社会の責任ある一員としての仲間入りを果たしたことを意味している。

引用文献

- Austen, Jane. *Emma*. 1816. Ed. Richard Cronin and Dorothy Macmillan. Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- . *Northanger Abbey*. 1818. Ed. Barbara M. Benedict and Deirdre Le Faye. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- . *Pride and Prejudice*. 1813. Ed. Pat Rogers. Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. 1975: Oxford: Clarendon, 1990.
- Casal, Elvira. "Laughing at Mr. Darcy: Wit and Sexuality in *Pride and Prejudice*." *Persuasions On-Line* 22.1. (2001). 2 Dec. 2013 <<http://jasna.org/persuasions/on-line/vol22no1/casal.html>>
- Duckworth, Alistair M. *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels*. 1971. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1994.
- Fraiman, Susan. "The Humiliation of Elizabeth Bennet." *Unbecoming Women.: British Women Writers and the Novel of Development*. New York: Columbia UP, 1993. 59-87.
- Gaylin, Ann. "I'm All Ears: *Pride and Prejudice*, or the Story behind the Story." *Eavesdropping in the Novel from Austen to Proust*. Cambridge: Cambridge UP, 2007: 26-41.
- Greenfield, Susan C. "The Absent-Minded Heroine or, Elizabeth Bennet Has a Thought," *Eighteenth-Century Studies* 39 (2006): 337-350.
- Johnson, Claudia L. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago: U of Chicago P, 1988.
- Jones, Hazel. *Jane Austen and Marriage*. London: Continuum, 2009.
- Macpherson, Sandra. "Rent to Own; or, What's Entailed in *Pride and Prejudice*." *Representations* 82 (2003): 1-23.
- Minna, Shinobu. *Jane Austen In and Out of Context*. Tokyo: Keio UP, 2012.
- Page, Judith W. "Estates." *The Cambridge Companion to Pride and Prejudice*. Ed. Janet Todd. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Stafford, Fiona. Introduction. *Pride and Prejudice*. By Jane Austen. Ed. James Kinsley. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Sulloway, Alison G. *Jane Austen and the Province of Womanhood*. Philadelphia: U of Pennsylvania, 1989.
- Tanner, Tony. *Jane Austen*. London: Macmillan Education, 1986.
- 松村聡子. 「絵画・空間・相互理解——『自負と偏見』における一考察——」手塚リリ子・手塚喬介編著『想像力の飛翔——英語圏の文学・文化・言語』東京：北星堂書店, 2003: 189-200.